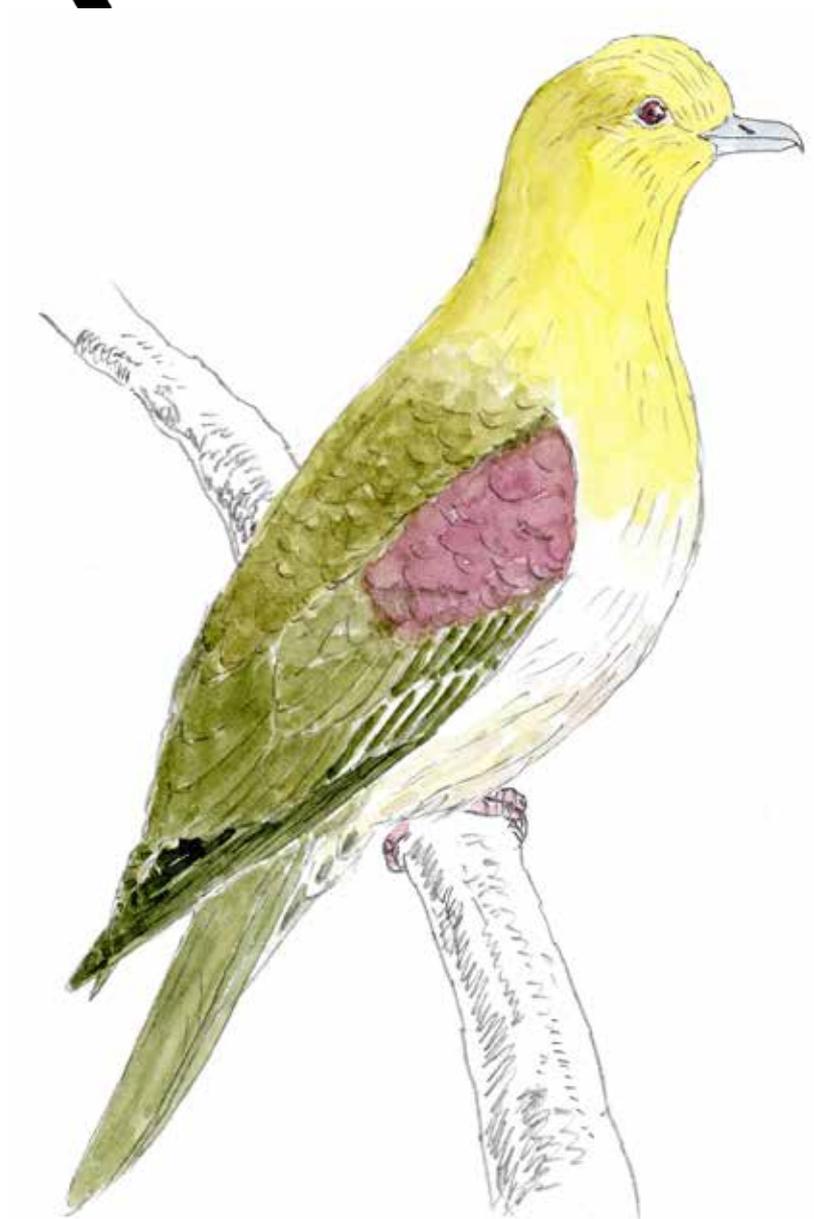


いさご



第 91 号

2017 年 4 月 日本野鳥の会三重
<http://miebird.org/>

干拓地とチュウヒ (*Circus spilonotus*)

桑名市 近藤 義孝

今まで、主に木曾岬干拓地におけるチュウヒの繁殖状況や越冬数などについて何回か報告してきた。今回は日本で発表されているチュウヒの繁殖地の報告などをもとに、チュウヒの置かれた状況と、その生息場所、特に干拓地でのチュウヒについて考察した。

チュウヒとは

チュウヒは、タカ目タカ科チュウヒ属に分類される鳥類で、チュウヒ属に属するものは世界では14種が知られている。日本に生息するチュウヒ類は、チュウヒ、ハイイロチュウヒが毎年観察されている。また、ヨーロッパチュウヒ、マダラチュウヒ、ウスハイイロチュウヒなども観察されることがある。日本で繁殖が確認されているのは、チュウヒ (*Circus spilonotus*) だけである。絶滅が危惧され、下記に示すようにランクさせている。

環境省レッドリスト (2006) 絶滅危惧 I B 類 (EN)

三重県レッドリスト (2015) 絶滅危惧 I A 類 (CR) 繁殖 絶滅危惧 II 類 (VU) 越冬

主な繁殖場所は、草原、湿地、ヨシ原などである。

目次

干拓地とチュウヒ (<i>Circus spilonotus</i>)	2
表紙の言葉	2
ツバメの子育て相談 (2015 ~ 2016 年)	5
「ツバメの巣をカラスとヘビから守る私の方法」	7
海辺の野鳥観察	8
全国鳥類繁殖分布調査 ご協力のお願ひ	9
大淀海岸探鳥会に参加して	10
カワセミの羽根	10
フクロウ類の特徴	11
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	12
今季のミヤコドリ (2016-2017)	16
事務局だより	17
野鳥記録	18
探鳥会報告	21
編集後記	24

チュウヒの繁殖地

今まで知られているチュウヒの繁殖が観察されている主な場所を表1に示す。

×印は最近では繁殖が確認できていない場所で、○印はしばらく前までは繁殖が確認されている。他にも繁殖が確認されている場所があるが、保護のために公表されていないところがある。

表1の場所は大きく、原野・河川流域と干拓地、埋め立て地に分けられる。北海道以外では、干拓地や埋立地といった人為的に造成された湿地を利用し

表1. 日本におけるチュウヒの繁殖地

繁殖地	所在地	現在の繁殖状況	繁殖地の改変・現状
響灘埋立地	福岡県	○	産業廃棄物埋立地から一部ビオトープへ
阿知須干拓地	山口県	×	スポーツ公園、きらら浜自然観察公園
錦海塩田跡地	岡山県	×	メガソーラー敷設
堺7-3区	大阪府	×	産業廃棄物埋立地から、共生の森へ
木曾岬干拓地	三重県・愛知県	○	メガソーラー敷設、一部保全区
河北潟干拓地	石川県	○	農地と未利用地など
利根川流域	茨城県	○	氾濫原など
八郎潟干拓地	新潟県	○	農地と未利用地など
仏沼干拓地	青森県	○	農地と未利用地など
勇払原野	北海道	○	原野
石狩川下流域	北海道	○	氾濫原など
サロベツ原野	北海道	○	原野・湿原

表紙の言葉

アオバト

津市 平井 正志

春、新緑の山路で、ア～オ、アオと独特の抑揚で鳴く。高い木の梢にいて、あまりじっくり見る機会がない鳥である。時折、海辺に塩水を飲みに来る。黄色と黄緑の大型のハト。オスは小雨覆がぶどう色。以前、青山高原での標識調査で、一度だけアオバトを捕獲したことがある。色彩豊かな実に美しい鳥であった。

ていることがわかる。

干拓地や埋立地におけるチュウヒの現状については、(公益財団法人)日本野鳥の会HPに「国内のチュウヒの現状とさらされている脅威」に詳しく述べられている。

私たち(日本野鳥の会三重、日本野鳥の会愛知県支部、名古屋鳥類調査会など)は2001年より木曾岬干拓地に立ち入り、調査を続けている。今回は木曾岬干拓地での17年にわたる調査と、他地域と比較しながら干拓地におけるチュウヒの今後について考察した。

干拓地におけるチュウヒの繁殖について

表2は、2001年から2016年にかけて、上から木曾岬干拓地で繁殖活動を行ったつがいの数、日本におけるチュウヒの繁殖地の数、繁殖に成功したつがいの数、観察できたヒナの数を表にしたものである。

上の表と下記の年表をもとに、チュウヒの繁殖に及ぼす人為の影響について考えてみたい。

1980年代 チュウヒの繁殖確認

1990年 探鳥会開始

「木曾岬干拓地探鳥会」として、日本野鳥の会三重県支部(現日本野鳥の会三重)と愛知県野鳥保護連絡協議会の共同開催

2002年 立ち入り調査開始

2002年 伊勢湾岸自動車道が木曾岬干拓地の上を通る。

2006年 伊勢湾岸自動車道北側で、埋め立てが始まる。

2006年 保全区造成開始(南端部約50ha)

2011年 保全区完成

2013年 メガソーラー設置開始(高速道路南側約78h)

2014年 メガソーラー商業運転開始

保全区内でチュウヒ3つがいの繁殖が可能であると三重県・愛知県の担当者は公聴会で述べたが、実際には保全区完成後は、繁殖の試みさえ観察できていない。保全区ができる前は深い溝で守られてい



た繁殖場所が改変されたため、チュウヒは干拓地中央部で繁殖を試みる事が多くなった。また、保全区造成工事が進むにつれて、繁殖を試みるつがいの数は3つがいから2つがいになり、繁殖も成功しなくなった。2013年以降繁殖を試みるのは1つがいしかなく、2014年以降は3年連続繁殖には成功しているが、10年以上前は3つがい繁殖を試みていた状況から考えるとチュウヒの繁殖活動の消滅が懸念される。

繁殖を試みるつがい数が減少し、繁殖が失敗する理由は、営巣地としての適した場所の減少、採餌できる場所の面積の減少、天候、侵入者(模型飛行機愛好家が干拓地内に墜落した飛行機を探すために侵入していた)などが考えられる。

山口県阿知須干拓地や岡山県錦海塩田跡地などでは、チュウヒの繁殖に適した場所や採餌場所の減少が繁殖に大きな影響を与えたと考えられる。

また、他の鳥類でも報告されていることだが、野鳥撮影マニアによる繁殖場所近くでカメラを構えてまっていたため、繁殖に影響を与えた報告もある。

木曾岬干拓地では、高木が以前より増加してきている。大阪府堺7-3区では、植樹による森を作ることについて、チュウヒの繁殖に影響を及ぼすことが懸念されていたが、植樹によって繁殖が行われなくなった。高木を好むオオタカなど棲息はチュウヒの繁殖にとって圧力となる。本来チュウヒは、河川の氾濫原や海岸の湿地で繁殖していた。そのような場所は台風や大雨のたびに、攪乱を受ける場所であ

表2 木曾岬干拓地におけるチュウヒの繁殖活動(2002年~2016年)

年度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
繁殖活動(つがい)	3	3	3	2	2	1	1	2	2	2	1	1	1	1	1
繁殖成功(つがい)	0	3	2	1	1	1	1	2	0	0	0	1	1	1	1
ヒナの数(羽)	0	3	2	2	1	1	3	6	0	0	0	3	2	4	3



る。高木なども倒れたり流されるため、チュウヒにとって適した場所となる。干拓地は攪乱が繰り返り、草原から森林への遷移が進むと考えられる。木曾岬干拓地は、干拓後遷移が進まず、草原の状態が長く保たれていた。遷移が進みにくい理由は土壌であったと考えるが、近年高木が大きくなってきたのは高速道路北側への土砂搬入により、木の成長に必要な栄養分が干拓地内へ持ち込まれたことなどの影響があるかもしれない。

チュウヒの生態を詳しく知りたい人は下記のHPが参考になる。『日本のチュウヒの生態』

<http://circusspilonotus.web.fc2.com/index.html/>

引用文献

- 浦達也・加藤和明. 2006. 北海道苫小牧市弁天沼周辺におけるチュウヒ *Circus spilonotus* の繁殖状況チュウヒサミット 2006 要旨集:10-15, 三重県.
- 中川富男. 2006. 河北潟干拓地および北陸におけるチュウヒの繁殖と生態. チュウヒサミット 2006 要旨集:41-45
- 納家仁・小海途銀次郎・清水俊男. 2007. 大阪府におけるチュウヒの繁殖記録. *Strix* 25:99-103.
- 多田英行. 2007. 仏沼におけるチュウヒの繁殖記録. *Strix* 25:87 - 93.
- 森井豊久. 2006. 木曾岬干拓地チュウヒ繁殖調査. チュウヒサミット 2006 要旨集: 28-36.
- 浦達也. 2010. チュウヒについて. チュウヒサミット 2010 要旨集: 3
- 平野伸明. 2010. チュウヒのくらし. チュウヒサミット 2010 要旨集: 4-6.
- Robert E, Simmons 1999 *Harriers of world*
- 日本野鳥の会三重. 2003. 特集: 木曾岬干拓地. しろちどり 41 号 3-10
- 近藤義孝. 2012. 木曾岬干拓地鳥類調査報告 (2007 年～2012 年)・しろちどり 74 号 5-6
- 大串龍一. 2002. 河北潟干拓地における小型哺乳類相とその生息漁の長期変動 (1976～1994 年) *Kahokugata Lake Science* 5.2002
- 森岡照明・叶内拓也・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版



ツバメの子育て相談 (2015～2016年)

玉城町 西村 泉

今年もそろそろツバメが飛来する季節になりました。しばらくすると事務局には、ツバメの子育てについて相談が届きはじめます。2015年から2016年にかけて特に印象に残った事例を紹介します。

1. 巣がたくさんある「道の駅」

2015年5月、とある道の駅に勤める女性から悲痛な電話があった。聞けば、道の駅でツバメの巣がたくさんあるにも関わらず外壁塗装工事が近々始まるという。現地に出向くと建物はシートに覆われ、すでに工事が始まっているかのような状況。外壁にはたくさんのツバメの巣があり、建物の周りを親ツバメたちが飛び回っていた。道の駅の責任者にお目にかかり、今ヒナがいる巣の場所は後回しにしてもらえないかをお願いした。この段階では、まだ工事ははじまっておらず責任者の方は思案中だったが、別棟にあるトイレの巣はすぐ取り外したいとおっしゃる。ヒナが孵っているかもしれないし、フンの問題ならビニール傘や取り付け台で防げると説得するも、お客さん第一だからと聞き入れてもらえなかった。

巣は高い梁の上にあり容易に近づくことは難しい。やむなく道の駅の人が長い梯子を使って巣ごど段ボールを取った。巣にヒナがいないことを祈ったが、降ろした巣には孵化したばかりのヒナ5羽がいた。

トイレ棟の外ならよいという許可を得て、外壁に籠へ入れた巣を取り付け見守ってもらった。しかし、可哀そうなことに親鳥は警戒して巣には戻っては来なかったという。まだ卵かもっと大きなヒナ

だったら助かった可能性があったかもしれないと残念に思った。幸い店棟の方は、工事関係者が「ツバメの巣は縁起物だから落とすたくない」と巣のない場所から順次工事を進めてくれたようで、ほっと胸をなでおろした。

1年後の2016年5月、様子を見に行くとトイレ棟の入口には、以前には見られな



写真①

かった対策がしてあった。巣の下には、フン除けの逆さにしたビニール傘、注意看板、入口にはツバメが中に入らないようネットが垂らしてあった(写真①)。周辺は数多くのツバメが飛び交い賑やかだった。

2. 宿泊施設の駐車場

2016年5月志摩市にある某宿泊施設の温泉を利用している男性から電話をもらった。「地下駐車場にたくさんのツバメの巣があるが、どの巣の前にもキラキラテープを垂らして親鳥が来ないようにしてある。毎日ここを利用しツバメを見るのが楽しみなのに…」と困惑した様子。現地へ急行するとキラキラテープは見当たらず、巣の近くの柱には「注意ツバメの巣あり」の看板があった(写真②)。男性に連絡をとると、すぐ知人とともに施設にテープを外すよう掛け合ったとのこと。こちらからも施設の支配人にお会いし、公益財団法人日本野鳥の会が作成した「あなたもツバメ子育て応援団」パンフレットを渡してツバメの子育てに協力をお願いした。



写真②

3. 団地で子供たちが…

2016年5月鈴鹿市のとある団地の住民(若い奥さん)からの電話があり、知らない子供が巣を壊したという。鈴鹿市の市川さんと現地へ出向く。1階フロアのコンクリート壁に作られた巣は半分壊れ、下には卵4つが粉々に割れていた。昨夕、小学校低学年ぐらいの児童数人が、捕虫網を使って巣を落とそうとしていたので注意したが、朝になって巣が壊されたのを発見したという。「児童はこの団地では見かけない、たまたま遊びに来たのかもしれない」というので、この学校区の小学校へ向かった。突然の訪問にもかかわらず教頭先生が快く会ってくださり、学校で「あなたもツバメ子育て応援団」のパンフレットを取り寄せて児童に向けた指導を行うとおっしゃっていただいた。

住民の方から「団地内でパンフレットを回覧板として回したい」と言われたので、さっそく何部かお渡しした。

4. 伊勢おはらい町

最後に相談ではないが、人とツバメに人気の高いおはらい町の様子を伝える。2016年5月おはらい町の軒先を見て回ると、どの店先にもツバメの巣の下にはフン除けの板や簾が設置してあった。

時々カラスがきてヒナを襲うそうで、店によってはフン除けの下にさらにカラス除けのための目の粗いネットが張ってある(写真③)。一人の女性が巣を見上げていた。声をかけると、カラスに巣ごと落とされたという。巣を籠に入れて元の場所につるしカラス除けもしたが親鳥は戻ってくるか、カラスはこないか心配しているとのこと。元の場所なら大丈夫だと思うが、また何かあったらと念のため会の連絡先を伝えた。別な日にも1羽のカラスはいたが、しばらくするとカラスの周辺にツバメが集まりだし大集団で鳴きながらカラスを攻撃した。カラスはしつこくその場にいたものの、やがて諦めたのかどこかへ退散して行った。ツバメたちの見事な連係プレーに感心した。

2017年2月この原稿を書くために、おはらい町にある老舗の有名和菓子店で話を伺った。責任者の女性は、「この店にきて6年になるが、初めはツバメの世話を面倒に感じていた。しかし毎年ツバメと関わるようになってツバメがやってくるのが楽しみになった」とおっしゃる。

ツバメが飛来するようになると、店先に立派な看板が登場する(写真④)。入口には3つくらい巣があり、なかでも一番人気の場所が正面玄関のしめ飾りの上で、ツバメどうしで取り合いになるという。ツバメが店に出入りし始めると、閉店時はツバメが帰ってくるまで戸板を少し開けておき帰ったのを確認してから完全に閉める。そして店内がフンで汚れないよう白紙で覆う。朝は開店前に早く開けるとのこと。これには全く頭が下がる。また「印象的だったのは、落ちたヒナのそばに親ツバメがいたことや、カラスを集団で追い出したこと」だという。自宅にもツバメの巣があったが、家族が減ったた



写真③

め来なくなったそうだ。ツバメには、「人とのつながりや人との共生」を実感していると言われた。

代々この店の当主はツバメを大切にしている、その様子を山口誓子(1901～1994年俳人)が句に詠んでいた。五十鈴川や朝熊山がすぐ傍に見える庭に句碑がある。



写真④

「^{かまど}巣燕も覚めゐて 四時に籠焚く」
昭和42年6月17日作。

説明看板には、「女主人が朝四時に起き籠を焚き、その時間には巣の燕も目覚めている。主人と巣の燕だけが目覚めている様子を詠んでいただきました」とある。早朝、静寂な時間に女主人が起きて、籠を焚き始める姿をツバメがじっと見ている、やがて店内に湯煙が立ち込める、そんな光景が目浮かぶようだ。

長い年月をかけてカラスやヘビから逃れるため、人の近くで子育てする技を身に着けたツバメ。減少傾向にあるといわれるツバメですが、今は昔のように「ツバメは農作物の害虫駆除に役に立っているから保護しよう」といっても通用しないのかもしれませんが。そのうえ清潔志向が高まり、ツバメを歓迎しない家が少なくないとも聞きます。しかし、先の和菓子店にくるほとんどのお客さんは、ツバメを見ると写真に撮って喜ぶそうです。また、どの事例にも共通しているのは、ツバメを見守るいわば番人のような存在です。ツバメ子育ての成功の鍵は、人の気配があることが前提だといえます。ツバメを守るとは、何よりもその魅力を伝え、ツバメファンを増やすことが今風なのかなと思います。

5月には、「おはらい町ツバメ探鳥会」を行います。よかったら、おはらい町のツバメを見に来てください。

ツバメを温かく見守ってくださる皆様、お忙しいなか取材に応じてくださった方々 大変お世話になりました。今後ともツバメをよろしく願います。

「ツバメの巣をカラスとヘビから守る私の方法」

鈴鹿市 市川 美代子

私の家では毎年ツバメが2番子まで子育てしますが、巣立つ数日前にカラスに食べられてしまったり、2番子はかならずヘビに見つかります。巣の下にヘビよけのとてもくさ〜い粒をホームセンターで買って、まいてもダメでした。アオダイショウは持っていかみついたりせずおとなしいのですが、食べ物であるツバメには夜でも、何度も来ます。庭にカエルが林から来ているので、そっちにしてと林に返しても、ヘビはけっこういるのでダメですね。

会員の方には、そのままと言われる方もおられますが、私にとってツバメは家族と同じなので、できるだけのことをやり、それでもダメならあきらめがつくと思い、いろいろと試してみました。去年は2番子まで無事に巣立つことができましたので、私の方法を書いてお送りいたします。参考に少しでもなったらうれしく思います。

カラスから守る方法

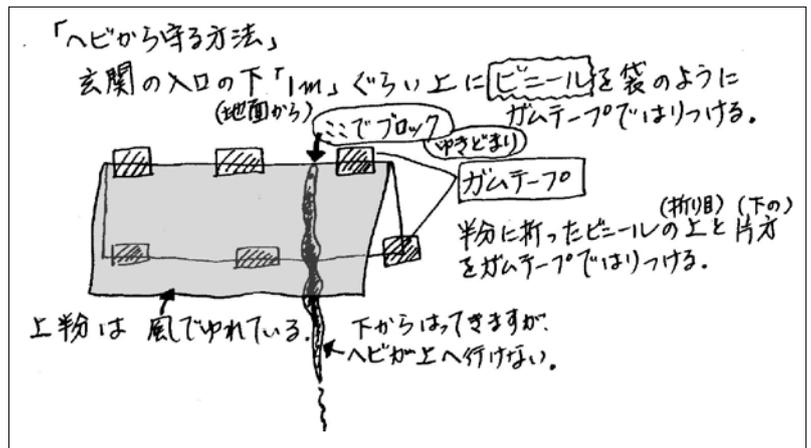
玄関に巣があるので入口を目の粗いアミ（えんどう豆などのツルをからませる）でおおう。上の方を少しゆるませ（たるませ）てツバメがそこから出入りするようになります。入口には「カラスよけです。くぐってお入りください」と書いたものをしばりつけました。4ヶ月だけのことですから少しの面倒は気になりません。

ヘビから守る方法

玄関の入口の下「1m」ぐらい上にビニールを袋のようにガムテープで貼り付ける。夜、ポトツと音がするので見ていたら、ヘビが上へ這っていけず下に落ちていました。何度もガラスの方へも這って行くのですが、ビニールが袋みたいになっているので上に行けずあきらめました。

☆ツバメの「フン」は巣の下にダンボールに石を入れて置き、新聞を敷いて交換しました。ご近所の農家の年配の方が、玄関でツバメに石を投げつけていたので、「なぜ？」と聞くと「ツバメのフンは面倒やし汚い、来て入らんわ」と言いました。農家だから害虫を食べてくれるツバメは大切にしてきたはずなのに、昔の人はツバメが来てくれると幸せになると言っていたのに、寂しい思いがいたします。

今年もツバメが帰って来てくれないと私には春が来た気がしません。



※事務局より

「あなたもツバメ子育て応援団パンフレット」(右側写真)は、ツバメの生態から巣が壊れた時の対処法まで詳しく書かれています。ご入用な方は、公益財団法人日本野鳥の会か、日本野鳥の会三重事務局へ連絡してください。



海辺の野鳥観察

伊賀市 玉田浩司

昨年3月に海なし県の奈良県から三重県に転居してきました。奈良での観察フィールドは里山中心、こちらは来てからも自宅近くの上野森林公園を中心に観察をしています。ある日鳥友達が「三重県に引っ越したなら海辺にいっぱいいいフィールドがあるよ」と教えてくれ、調べると自宅からも1時間ほどで到着するではないですか。不慣れた海辺の野鳥の観察ですが新しい世界が広がった感じがして非常に楽しく、足場もいいので美味しいランチもあるよと言ってよく妻を誘って出かけます。

2月8日、五主池に行ってみました。ところがフロート式ソーラーパネルの工事が始まっており、あれだけいた水鳥が全くいない！いつも見かけるカモ類はすべて海側に移動していました。仕方なく雲出川河口に移動、たくさん野鳥たちいるものの潮の満干を見誤り非常に鳥たちが遠い、ここらが海辺の観察に慣れていないと反省しきりです。対岸の香良洲海岸へ移動してやっとミヤコドリをゆっくり観察できました。

次はシギの仲間を見たくて町屋浦へ。そ〜っと



砂浜へ行くといました！ハマシギとミユビシギ混群です。かなりの数がみんな片脚で立ってウトウトとしています。しばらくそうしているかと思うと何に驚くのか一斉に飛び立ちますがこれが壮観です。糸乱れぬ飛翔で旋回、まるで群舞の見えるかのようなようです。最初は双眼鏡やスコープで観察していた妻も「これは肉眼で全体を見る方がいい！」と大喜び、何度も繰り返す飛翔に大満足です。こんな砂浜がソーラー発電所にならずこれからも存続するよう願うばかりです。

この日確認した野鳥は3ヶ所で41種類、非常に楽しい観察となりました。



全国鳥類繁殖分布調査

繁殖シーズンスタート！ 調査協力をお願いします！

四日市 三曾田 明

しろちどり第 87 号でお知らせした「全国鳥類繁殖分布調査」は 2016 年～ 2020 年まで続き、今年 は 2 年目となります。いよいよ繁殖シーズンに入る ので、ここで昨年 の状況をお知らせして、あらため て調査へご協力をお願いしたいと思います。

図 1 は当会が計画した独自ルート の調査状況で、水色の区域が調査済のところ です。正式に結果が反 映されているところのみで、実際はもう少し多いと 思います。

図 2 は「全国鳥類繁殖分布調査」のホームペー ジの『過去 2 回 の調査でわかってきた日本の鳥の現 状』のイメージです。大きな図は実際のホームペー ジ (<http://www.bird-atlas.jp/result.html>) を参照し てください。そして、図 3 は 2017 年 2 月時点での 調査結果による分布図です。1978 年以前は西日本 に集中していたものが、1929 年以降は東北地方ま で分散し、そして現在は……。残念ながら図 3 で はまだまだ情報が足りなくて分かりません。

この他、会員の方に配布している「繁殖記録用 紙」、当会のホームページ「繁殖調査報告サイト」 (ホームページ右側にある「繁殖調査」のアイコン から) による情報もわずかでした。

1 年目だったので情報が少ないは当然ですが、今 年は図 1 の水色の区域が大幅に増えるように対策 していきます。会員のみなさんも、まずは繁殖の観 察記録をしっかり取っておいて、情報の提供をお願 いします。日本全国の野鳥好きな方々の力を合わせ て、「日本の鳥の今」を描いていきましょう。



図 1 三重県内の調査状況

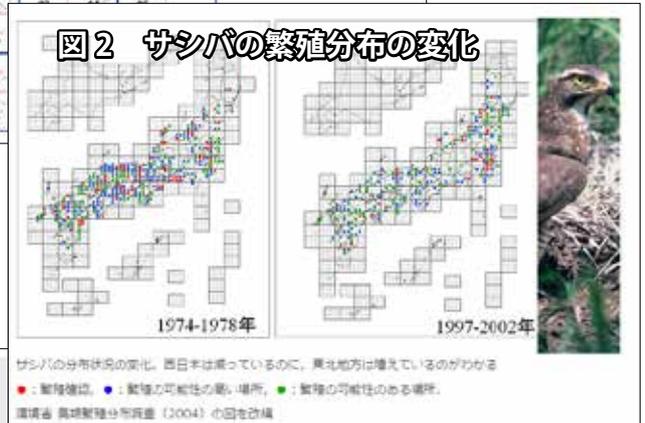


図 2 サンバの繁殖分布の変化



図 3 サンバの調査状況

サカツラガン Swan Goose (*Anser cygnoides*) について

サカツラガンが 2016 年 11 月 30 日三重県御浜町で中井節二によって観察された。(野鳥記録 18 ページ参照)

サカツラガンはアジア極東部に棲息するガン。繁殖地はオビ川からカムチャツカまでの極東ロシアの南部。ヒシクイやマガンのように北極海沿岸では繁殖しない。ガンの中では南で繁殖する種。冬は中国大陸、朝鮮半島などで越冬する。少数羽が日本で見られる。中国では家禽化されシナガチョウとなっている。三重県ではこれまで、記録が見当たらず、初記録ではないだろうか。IUCN によると棲息数は 60,000 ないし 90,000 羽と推定され、絶滅危惧種 (VU) とされている。(平井)



大淀海岸探鳥会に参加して

伊勢市 内藤 至子

1月29日(日)大淀海岸探鳥会に参加させていただきました。昨年秋に野鳥の会に入会しまして初めての探鳥会でしたが、皆様にとっても親切にして頂き、楽しく色々な鳥の観察をすることができました。

初めは大淀の港内に浮かぶカモ達を中心にゆっくりと見て歩きました。カモの種類や雌の色、ヒメウ、ハジロカイツブリ、セグロカモメなど、一人ではよくわからないようなことを、どんどん教えて頂き、とても勉強になりました。ヒメウが見られるのは珍しく、今日はラッキーという事でした。もちろんヒメウを見るのは初めてでしたが、私としては天気が良く暖かだった事も、とてもラッキーでした。

カモメはユリカモメしか見分けられなかったのですが、セグロカモメを教えてくださいました。フィールドスコープで拡大して見せて頂いて、そのどっしりした貫録に驚きました。セグロカモメは大きな船で、前を横切るヒメウはボートのようでした。また、港のそばの木の先端にホオジロがいるのも教えてくださいました。綺麗な声と背中オレンジ色が印象的でした。ちらっと見えた横顔が白より黒っぽいので、何故ホオジロ?とってしまいました。

堤防にあがると広々とした砂浜の海岸が現れ、目の覚めるような気持ちのよい景色でした。鳥は少ないと思ったのですが、実は色々な鳥がいました。は



るか遠くのダイゼン、波間のウミアイサ、かわいいミュビシギの群れなど、私一人では到底見つけられなかったと思いますが、全部教えて頂きました。またセグロカモメが空から海に突っ込んで、何かを捕まえ飛び去って行くのを目撃しました。穏やかな港内と違ってここでは、鳥達も強く逞しく見えます。

集合場所に戻る帰り道は、雑草の茂った空地やソーラーパネルが設置された場所の横を通りました。この辺りにはたくさんの小鳥がいました。小鳥は早いので、見つけてもすぐにどこかへ消えて、見えなくなってしまいます。小鳥を探すときは鳴き声を頼りに探すのだそうです。とっても姿も似ているし声も似ているし、なかなかの難題です。比較的に見つけやすかったのは、ビンズイという小鳥でした。緑がかったスマートな体で尾を上下に振り振り、飛んではとまり、まるで遊んでいるかのようでした。

探鳥会の2時間はあっという間に過ぎました。新しい人との出会い、鳥達との出会い、とても幸せに思います。ぜひまた参加させて頂きたいと思いません。どうもありがとうございました。

カワセミの羽根

菰野町 矢田 栄史

いつも観察に行く三滝川でカワセミを見る機会が多いです。昨年(2016年)11月のある日、たまたまですが、真後ろからカワセミを撮影できました。みなさんはこの画像を見て何か感じられませんか?

顔の横に黒いところが左右対称に見えますね。僕はもしかして眼かな?とも思ったけどそうではありません。僕は数年前から三重昆虫談話会の会員でもありまして、昆虫特にトンボと蝶にもおおいに興味があります。このカワセミの画像を昆虫にとっても詳しい方に見てもらいました。彼いわく、これは後ろからの天敵に対するアピールではないか、どのコメントでした。つまりしっかりあんたを見てるよ、襲うんじゃないよってことでしょうか。ふたりの方

が同じ意見でした。

ではそうだと他鳥でも同じようなのはいるのか?あるいはもっと違う何かでこのような形態がある鳥はいないのか、鳥に限らずほかのいきものではどうか、などと興味は広がりますが、僕にはよくわからないしそうした知見ももちあわせていません。いきのもののこと、ほとんどわからないことばかりではないでしょうか?

鳥の名前は知っててもそれで終わってしまってる?どんな暮らしをしてるのか、たとえばどこで眠って1日をどんなふうにするか などなど。わからないから観察する楽しみもあるし、観察に行くから行動がわかる。そんなスタンスでこれからもフィールドに出たいと考えています。



フクロウ類の特徴

四日市市 笹間 俊秋

自然界においてフクロウ類は夜行性であり鳥好きの人でも気軽に観察できるかと言えばほとんどの方が見たことが無い存在である。唯一神社などの大木に営巣している時に確認できる程度であろう。最近、巷ではフクロウカフェが人気になり各地でフクロウとふれあえる所が多くなった。テレビ、webや雑誌などでも特集などが生まれ身近な存在となっている。

フクロウ類の魅力のひとつに大きくつぶらな目が挙げられる。他の鳥類と違い人間と同じ様に顔の正面に付いている。普通の鳥は目が側面に付いており(写真1)あまり首を動かさなくとも後方まで視認でき素早く外敵を察知することが出来る。しかしフクロウ類は猛禽類であるため狩をする際に両目で視認し遠近の距離を正確に測りながら獲物を捕獲している。そのため後方への視界はまったく効かず、それを補完するために首が挙げる270度も曲がり真後ろまで顔を向けることが可能である。(写真2)この特徴はチュウヒ類にも見られ同じ様に首が真後ろまで曲がる様子が観察できることがある。(写真3)



写真① ヤマガラ



写真② アオバズク



写真③ ハイイロチュウヒ



写真④ シマフクロウ

さらにフクロウ類は夜に活動する際わずかな光を捉えるため目は丸く大きい。しかし眼球は人間の様に動かすことは出来ず焦点を合わせるのみである。(写真4)そのため、昼間にアオバズクの営巣場所で観察していると首を回したりかしげたりする仕草が見られるが、これは観察している人間に対

して警戒している証拠であり決して愛嬌を振りまいている訳ではない。(写真5)また、フクロウ類の顔は羽毛で縁取られ(顔盤)耳は目の横にありこの顔盤の羽毛で覆われている。この顔盤と呼ばれるものは非常に発達した機能を持ち小さな音でも拾うアンテナの役目になっている。この顔盤は音の位置、方向、距離を立体的に認識することができ、音だけでも獲物の位置を正確に特定して雪の中や藪の中でも捕まえることができる。

フクロウ類は夜行性と言っても悪天候で狩が出来ない日が続くと昼間でも狩をすることがある。しかし、猛禽類といえどもタカ類などよりも小型故に昼間の狩は自身が狩られるリスクもあり命がけになる。餌が不足していない時は昼間樹洞や木の横枝などでほとんど動かずにじっと休んでいる事が多く位置を特定できれば観察は容易であろう。

フクロウカフェで気軽にふれあえる場所が出来た反面、やはり飼育されている個体はかなりストレスに弱く、犬猫と違い躰などはする事が出来ないため飼育環境が良くない施設では糞を出来るだけさせないために水分を制限したりするところもある。フクロウ自身は我慢強く体調不良を訴えたりすることがなく、とまり木に縛られたまま突然倒れて絶命することが多く問題になっているようだ。やはり飼育された状態のものより自然界でいきいきとしたフクロウを観察できれば良いが、当然最近の環境破壊はすべての動植物に影響を及ぼしている。餌の捕獲はもちろん営巣するための大木や樹洞の不足は深刻な問題である。

去年、知床を訪れた際、シマフクロウを長年観察されている方のお話を聞く機会があった。その方の話によるとシマフクロウは現状営巣には大木の樹洞を利用している個体は無く、すべて環境省が設置した巣箱を利用しているようだ。そのため繁殖個体と状況はしっかり把握されていて生まれた雛にはすべて足環が着けられていて日本で生まれた個体はすべて登録されている。しかし、縄張りや繁殖場所である小川が飽和状態で巣立った若鳥がペアと縄張りが見つけれずに放浪している個体が多いそうである。

その他のフクロウ類に関しても巣箱を利用している個体は多く人工物をうまく活用する器用さを持っている。そのため人間が環境を整えてやれば個体数の減少は無くなり飼育する必要もなく、うまく共存することができれば我々は自然な姿を普通に観察することができるだろう。



写真⑤ アオバズク

シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化

— 連載第7回 メリケンキアシシギ —

津市 今井 光昌

メリケンキアシシギは日本では春の渡りの時期に少数が主に太平洋側の岩礁や磯で観察されています。隣県の渥美半島にも毎春、特定の岩礁に少数のメリケンキアシシギが渡来しています。三重県でも熊野灘に面した岩礁やテトラポットなどにメリケンキアシシギが来ているのではと思いを探してみました。結果、2014年、2015年、2016年と毎年続けて観察できました。

メリケンキアシシギが観察できたのは春の渡りの時期に限られ、秋の渡りの時期にはこれまで一度も観察できていません。また、類似のキアシシギが、三重県では春・秋の渡り共に海岸の砂浜・干潟や水田などで観察でき、観察個体数も多いのに対し、メリケンキアシシギが伊勢湾内の海岸・干潟やテトラ

ポットで見られることはなく、観察できたのは湾外の熊野灘の岩礁地帯に限られ且つ少数でした。岩礁地帯では少数のメリケンキアシシギとキアシシギがよく一緒にいるのが観察出来ました。

熊野灘沿岸の岩礁地帯でキアシシギに似た鳥を見つけたらメリケンキアシシギを意識しましょう。メリケンキアシシギは岩場では蟹を、堤防下のテトラポットでは主にフナ虫を捕食しています。鳴き声はよく通る声で「ピリリリリリリ」と鳴きます。キアシシギの鳴き声とは明らかに違います。鳴き声だけで探せることが何度かありました。尚、メリケンキアシシギとキアシシギの採餌行動に特に違いは見られません。

メリケンキアシシギとキアシシギ

図1のメリケンキアシシギと図2のキアシシギは羽色の濃さで両種の見分けがつかますが、羽色は光の具合や撮影角度で変わります。それぞれの特徴がよく出た個体はよいのですが、メリケンキアシシギに似たキアシシギ、キアシシギに似たメリケンキアシシギもいるため、識別が紛らわしい場合もあります。

「キアシシギより上面が暗色で、下面の波状横斑の黒味が粗く強い。嘴が黒い（基部に少し赤褐色味がある）。体が大きく見える」等から、まずメリケンキアシシギだろうという目星をつけ、詳細な特徴点はその後に確認していきます。メリケンキアシシギに比べるとキアシシギは嘴基部が黄色いものが多いことも識別する際の助けになります。



図1 メリケンキアシシギ 夏羽 2011. 05.25



図2 キアシシギ 夏羽 2011.05.25



図3 メリケンキアシシギ 2014.05.27



図4 キアシシギ 2014.05.27

成鳥夏羽

図3と図4は同じ岩礁にいたメリケンキアシシギとキアシシギです。図3のメリケンキアシシギは下面の波状横斑が腹部中央まで達して太く粗く、横斑は下尾筒にも見られます。下面の横斑の黒味の強さに加え上面が暗褐色であることから、キアシシギに比べ体全体が暗色に見え、少し大きめの体形にも見え、足も太く感じます。図4のキアシシギは全体の羽色がメリケンキアシシギより明るく、下面の横斑も腹部中央まで達していません。

また、図5のキアシシギは横斑の黒味が強く一見してメリケンキアシシギに似て見えますが、メリケンキアシシギに比べ胸から脇の横斑の密度が低く、キアシシギと判断できます。個体差を考えると横斑が少し弱いとか下腹部の白色部が広いからといってメリケンキアシシギでないとは言えません。図6と図7はメリケンキアシシギの成鳥夏羽ですが、図7の個体は下腹部の白色部が広いです。



図5 キアシシギ 2011. 05.30



図6 メリケンキアシシギ 2010. 05.25



図7 メリケンキアシシギ 2010. 05.25

嘴の溝の長さ

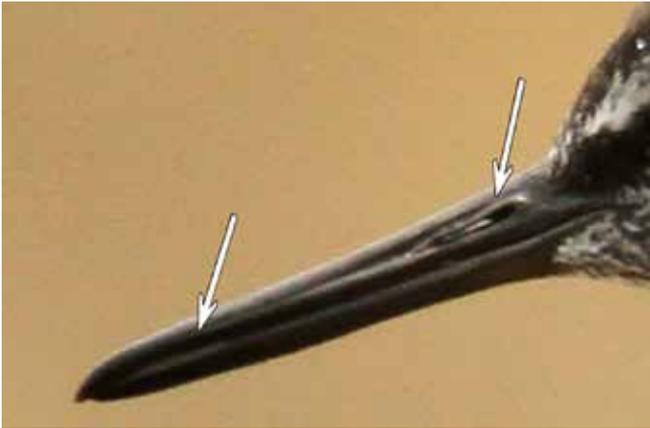


図8 メリケンキアシシギ

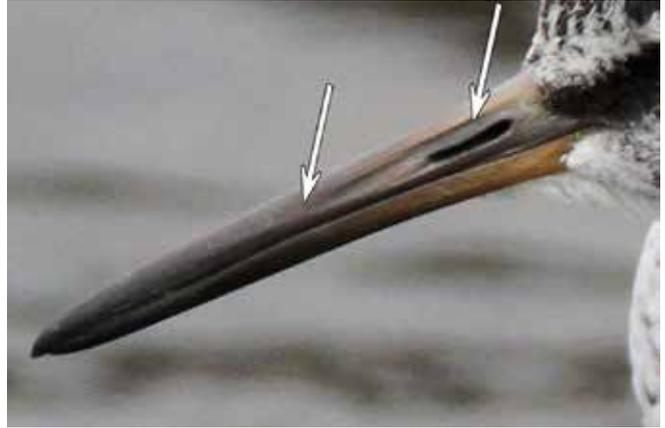


図9 キアシシギ

嘴の鼻孔の上から続く溝の長さの違いがメリケンキアシシギとキアシシギを見分ける最も有効な識別点かと思えます。メリケンキアシシギの溝は嘴

の2/3ほどありますが、キアシシギは1/2ほどしかありません。

上尾筒の模様



図10 メリケンキアシシギ



図11 キアシシギ

メリケンキアシシギの上尾筒がほぼ一様な灰褐色なのに対し、キアシシギの上尾筒には白い羽縁とその内側に褐色の帯があります。ただ、上尾筒に模様のないのがメリケンキアシシギで模様のあるのがキアシシギと断定はできません。メリケンキアシシギにも稀に少し模様のある個体がいるようですし、キアシシギにも模様の弱い個体があります。上尾筒の模様のあるなしで両種を判別するには少し無理があるかもしれませんが有効な識別点の一つであることは確かです。

他のシギにも言えることですが種の識別は一つの識別点だけでなくそれぞれの特徴をどれだけ多く持っているかにあります。メリケンキアシシギの場合は摩耗で退色したり、原形を留めなかったりすることがない嘴の溝の長さが最も有効な識別点になると思います。

跗蹠後面の模様



図 12 メリケンキアシシギ

メリケンキアシシギの跗蹠(ふしよ)後面は網目状の鱗模様で、キアシシギははしご状の鱗模様です。その違いが分かる鮮明な写真を撮ることが難し



図 13 キアシシギ

いという点で、両種の識別点としての利用価値は「嘴の溝の長さの違い」に比べ劣るのではないかと思います。

第1回夏羽



図 14 メリケンキアシシギ 2014. 05.27

図 14 の個体は胸から腹部の横斑がなく、冬羽のような羽衣で、初列風切は摩耗が激しく幼羽と考えられることから第1回夏羽と判断しました。また、

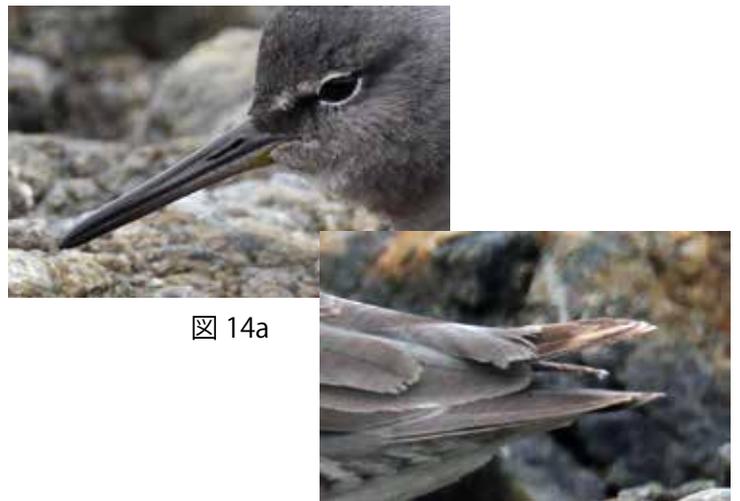


図 14a

図 14b

鼻孔の上の溝が嘴の2/3ほどあることからメリケンキアシシギと判別できます。

図 15 はキアシシギです。雨覆に激しく摩耗した幼羽が残り、それより摩耗の少ない灰褐色の冬羽、白い羽縁とその内側に黒褐色斑のある夏羽が混在していることからキアシシギ第1回夏羽と判断できます。



図 15 キアシシギ 2012. 06.17

最後に

三重県はメリケンキアシシギの渡来数が少なく、渡来時期も春に限られることから、キアシシギ夏羽と比較し、両種の夏羽における主な識別点をまとめました。

今季のミヤコドリ (2016-2017)

津市 今井 光昌・平井 正志

ミヤコドリ一斉カウントは2010年1月に安濃川河口、五主海岸、および豊津浦で当会が行ったのが最初である。2014年には伊勢湾西岸ほぼ全域でカウントする体制が作られた。

この冬(2016-2017年)、合計3回の一斉カウントを行った。カウントは小潮の満潮時、あるいは満潮後、1時間程度の間に行い、12-16名の会員が参加した。

伊勢湾西岸におけるミヤコドリ生息数

今季は3回とも100羽以上のミヤコドリが観察された。そのうち、1月のカウントではこれまで最高の138羽を記録した(表)。また、10月13日には今井が独自の調査で、126羽のミヤコドリを雲出川河口右岸で観察している(野鳥記録参照)。また、2017年2月の調査では調査後の時間外(12:02)に安濃川河口で対岸から72羽をカウントした。これを採用すれば116羽となるが、これは参考記録とする。これらの記録を考慮すると110羽以上が2月中旬まで棲息していた可能性が高い。

2014-2015の冬季は約60羽であり、また昨冬(2015-2016年)は96-98羽であった。したがってこの冬の棲息数はかなり増加したといえる。

ミヤコドリの分散

伊勢湾西岸のミヤコドリで、近年特徴的なのは県北の高松海岸で、多数のミヤコドリが常に観察されるという点である。2014年の3月まではゼロかあるいは数羽程度が観察されていただけであったが、2015年1月以降は30-40羽が記録されている。今回2016年1月には62羽が観察されている。

また、金剛川河口以東でもミヤコドリがしばしば観察されるようになった。棲息範囲が徐々に拡大する傾向にある。金剛川河口以東でも観察体制を強化すべきであろう。

今回12月から2月の3回のカウントで、カウント数に30羽前後の開きがあった。数が多くなり、カウントの正確性がやや落ちることに起因するのか、あるいは少数羽が、これまで、カウントしていない場所にいることがある可能性も否定できない。

2014年1月と3月に多数のミヤコドリが観察された愛知県西尾市矢作古川河口ではその後、ごく少数が観察されることはあったが、恒常的な棲息地とはなっていない。しかし、当時2ヶ月間は滞在していたことから、棲息しうる環境が整っているのであろう。今後も観察を続けることが大切である。その他、伊勢湾や三河湾方面でのミヤコドリ観察の情報はない。

今後もカウントを続けるが、多数のミヤコドリが観察される場所では計数が難しいため、複数の会員で調査することが好ましい。会員諸子の積極的な参加を乞う。



事務局だより 活動の記録 (2016年12月～2017年2月まで)

- 2016/12/05： 第1回ミヤコドリ・カウント (有志)
- 2016/12/26： メガソーラーの乱開発に対し県との懇談会を開催、環境保全を要望
みどり共生推進課他7部局が参加 (志摩市民団体他と共同で開催)
- 2016/12/29： 新四日市市長とメガソーラー開発について懇談会開催、環境保全を要望
(地元自治会、他団体と共同で開催)
- 2017/1/7： 第2回ミヤコドリ・カウント (有志)
- 2017/1/10： 会報 しろちどり 90号 発送作業
- 2017/1/21： 当会として今後のメガソーラー開発についての取組方針検討会を開催
しろちどり編集会議
- 2017/2/1： 当会と足見川メガソーラー開発事業者との意見交換会開催
- 2017/2/9： 県会議長、副議長とメガソーラー開発について懇談会開催、環境保全を要望
(地元自治会、他団体と共同で開催)
- 2017/2/11： 第2回しろちどり編集会議
- 2017/2/16： 四日市市議会各派 (6会派) へ請願書の説明実施
(地元自治会、他団体と共同で開催)
- 2017/2/18： 第3回ミヤコドリ・カウント (有志)
- 2017/2/18： チュウヒ・サミットの打ち合わせ



ヒドリガモ

事務局からお知らせ

◆スタッフ大募集

日本野鳥の会三重は、有志のボランティアによって支えられています。あなたもご協力いただけませんか？ 探鳥会のリーダーや企画・運営・調査 など興味のある方、事務局 (090 - 1566 - 6010) までお気軽にご連絡ください。

◆釣り糸・釣り針 回収のお願い

野外に放置された釣り糸 (テグス) や釣り針で、多くの野鳥が傷ついたり命を落としています。釣り糸・釣り針を見つけたら積極的に回収をお願いします。

◆野鳥は許可なく飼養・捕獲できません

三重県では1世帯にメジロ1羽の飼養が認められていますが、捕獲は禁止されています。野鳥を捕獲している人を見かけたら、密猟が疑われるので声かけはしないでください。すぐその場を離れ「110番通報」してください。また鳥籠を積んだ不審な車両を見たり、人家から野鳥の鳴き声が聞こえたら、全国野鳥密猟対策連絡会のホームページ「密猟110番」か、事務局へご一報ください。

野鳥記録

野鳥記録 (2016年11月11日から2017年02月20日までに報告があったもの)

野鳥の種類名	個体数	観察月日	観察場所 (三重県)	雄 / 雌 / などの区別	記録報告者名 / 情報元	脚注
トモエガモ	1	2016年11月9日	四日市市北勢中央公園	♂・成鳥	山神 勝治	1
ベニマシコ	2	2016年11月10日	三重郡菟野町三滝川	♀	矢田 栄史	2
シロハラ	1	2016年11月10日	三重郡菟野町三滝川		矢田 栄史	3
カワセミ	1	2016年11月10日	三重郡菟野町三滝川	成鳥♂	矢田 栄史	4
ルリビタキ	1	2016年11月18日	三重郡菟野町三重県民の森	雄	矢田 栄史	5
ミヤマホオジロ	7	2016年11月18日	三重郡菟野町三重県民の森	雄	矢田 栄史	6
ホオジロガモ	2	2016年11月21日	いなべ市大安町 両が池	♀成鳥と ♂第1回冬羽	伊藤 敏和	7
ミヤマホオジロ	1	2016年11月21日	三重郡菟野町三重県民の森	雄	矢田 栄史	8
コチョウゲンボウ	1	2016年11月21日	三重郡菟野町千草	不明	矢田 栄史	9
ハジロカイツブリ	1	2016年11月20日	海蔵川河口		川瀬 裕之	10
ミヤコドリ	126	2016年10月13日	松坂市五主町 雲出川河口右岸	成鳥から幼鳥まで	今井 光昌	11
ピロードキンクロ	3	2016年12月7日	津市白塚町白塚海岸	幼鳥	山神 勝治	12
アビ	1	2017年1月4日	四日市市楠町	不明	山神 勝治	13
ハギマシコ	約30	2017年1月21日	松阪市飯南町相津峠		西村 四郎	14
ハイイロチュウヒ	1	2017年1月25日	三重県伊賀市比自岐	♂成鳥	玉田 浩司	15
ウミスズメ	1	2017年2月1日	四日市市楠町派川沖		山神 勝治	16
ホシムクドリ	2	2016年10月31日	御浜町神志山		中井 節二	17
ツメナガセキレイ	1	2016年11月9日	熊野市有馬町水田	幼鳥	中井 節二	18
タマシギ	1	2016年11月11日	熊野市有馬町農業用水路	雄	中井 節二	19
サカツラガン	2	2016年11月30日	御浜町阿田和小松原		中井 節二	20
ワシカモメ	3	2017年1月4日	三重県熊野市甫母町	第4回冬羽、 第3回冬羽、幼鳥	中井 節二	21
イワツバメ	7~8	2017年2月11日	桑名市員弁川		山神 勝治	22
*1 (シロオオタカ)	1	2016年4月5日	鈴鹿市下大久保町民家		(中日新聞)	23
*1 (ナベヅル)	6	2016年10月30日	志摩市磯部町穴川	成鳥5羽、幼鳥1羽	(中日新聞)	24
*1 (コウノトリ)	1	2016年11月10日	紀北町矢口浦大白公園		(中日新聞)	25
*1 (ヒシクイ)	1	2016年11月11日	紀北町矢口浦		(中日新聞)	26

※ *1 () は、いずれも中日新聞の記事による情報

注：

- 脚注 1 マガモと一緒に行動していた、滞在はこの日1日だけだった。
脚注 2 1羽が対岸からフィッフィッと鳴きながら飛んだ、15分後対岸で♀2羽が鳴いてるのを発見
脚注 3 発見時は、すでに来ているツグミかなと思ってよく見るとシロハラだった。
脚注 4 後頭部や頭の横の白い羽根などいままでみたことがなかった。
脚注 5 いい声で鳴く鳥の音がする、過去の経験からルリビタキとすぐにわかった。
脚注 6 15日に3羽初認したと聞いていた。18日に午後現地へ行くと小枝にとまっていた。
脚注 7 添付写真は♀成鳥ですが、♂第1回冬羽も一緒に居ました。
脚注 8 遊歩道を歩いていると羽づくろいや、のびをしたりかなりリラックスした様子。
脚注 9 チョウゲンボウと思って撮影、帰宅後よく見ればコチョウゲンボウであった。
脚注 10 11月16日にも目撃していたのですが、遠くにいたため双眼鏡では識別出来ず。
脚注 11 正確なカウントは難しく、数人で数えたカウント数で最も一致したのが126羽だった。
脚注 12 1羽は、はるか沖合で泳いでいたが、2羽が近くで貝を捕って食べていた。
脚注 13 ここの海岸では、初めて観察、近くへ泳いできてくれたのでラッキーでした。
脚注 14 30羽程の群れで活動していました、地上で餌を食べ、すぐ飛び出し忙しく動いていました。
脚注 15 タヒバリ・カシラダカの群れに対して狩りをおこなっていた。
脚注 16 伊勢湾航路では、よく見られますが湾内奥深くで見たのは、初めてでした。
脚注 17 神志山で2羽見て11月4日熊野市有馬町で見ました、多分同じ個体だと思われる。
脚注 18 11月に見えるツメナガセキレイは遅い記録です。ジッジッと鳴いていたのと足が黒かった。
脚注 19 こちらはタマシギが、非常に珍しくて11月に見れたのも初めての記録です。
脚注 20 サカツラガンは、多分三重県で初の記録だと思います。
脚注 21 初列風切りは、暗灰色していた。同じ所に3羽もワシカモメがいるのは少ない。
脚注 22 例年3月10日過ぎなのだが、今年は1ヶ月も早く飛来したのでびっくりです。
脚注 23 羽根を負傷、高橋獣医の所に保護され治療、4月中に回復して放鳥。
脚注 24 志摩市内で見えるのは、15年以上前、渡りの途中では？
脚注 25 足環から2016年4月に生まれた♀と判明。
脚注 26 衰弱した状態で保護14日に回復し放鳥



トモエガモ：山神 勝治 撮影



ビロードキンクロ：山神 勝治 撮影



アビ：山神 勝治 撮影



ハギマシコ：西村 四郎 撮影



ツメナガセキレイ：中井 節二 撮影



ウミスズメ：山神 勝治 撮影



タマシギ：中井 節二 撮影



ワシカモメ (第3回冬羽) : 中井 節二 撮影



イワツバメ : 山神 勝治 撮影



探鳥会報告

● 中村川探鳥会

2016年11月6日(日) 9:30～11:00

松阪市嬉野一志町 中村川中流域

小野 新子 竹川 華子 参加者17名(会員17名)

キジ、マガモ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ダイサギ、イカルチドリ、タシギ、クサシギ、オジロトウネン、ミサゴ、トビ、チョウゲンボウ、モズ、ハシボソガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ムクドリ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ 計27種

今年は晴天に恵まれたが風が強かった。三脚が飛ばされそうなほどだ！アオジやホオジロも繁みから出てこない。元気なのは、ジョウビタキとモズぐらいだ。しかし今年はオジロトウネンが久しぶりに姿を見せた(6年ぶり)。改修された河川が少し落ち着いてきたのかもしれない。イカルチドリは7～8羽、めずらしくタシギも中洲で見えかくれていた。

● 海蔵川探鳥会

2016年11月23日(水・祝) 9:45～11:45

四日市市西坂部 海蔵川沿い

川瀬 裕之 参加者17名(会員14名)

カルガモ、ホシハジロ、カイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、バン、ノスリ、カワセ

ミ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、ホオジロ、カワラバト、カルガモとマガモのハイブリット 計20種

前回の探鳥会で地元ローカル情報誌の取材を受け、今回の探鳥会を宣伝して頂いたのと独自のチラシを観察会の時に配ったので、その効果か初めての参加者が4人来て下さいました。あいにくと天気は良かったのですが今冬一番の冷え込みで北西の冷たい風が強く、探鳥会にはきびしい天候となりました。

カルガモの歓迎をうけスタートしましたが、やはり小鳥類の姿が確認できません。いつものカワセミもちょっと姿を見せてくれただけで頻繁に飛翔してくれませんでした。途中、カルガモとおそらくマガモのハイブリットが見られて、「マルガモ」と命名して一同笑いの中、解散となりました。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2016年11月27日(日) 9:00～11:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤 義孝 米倉 静 参加者3名(会員3名)

オカヨシガモ(6)、ヒドリガモ(2)、マガモ(13)、カルガモ(20)、ハシビロガモ(20)、コガモ(3)、ホシハジロ(5)、キンクロハジロ(7)、スズガモ(5)、カイツブリ(3)、キジバト(30)、カワウ(6000)、アオサギ(6)、ダイサギ(1)、ナベヅル(1)、バン(1)、オ

オバン (15)、タゲリ (5)、イソシギ (2)、ミサゴ (5)、カワセミ (1)、チョウゲンボウ (1)、モズ (4)、ハシボソガラス (10)、ハシブトガラス (70)、ヒバリ (1)、ヒヨドリ (100)、ツグミ (70)、ジョウビタキ (3)、スズメ (5)、ハクセキレイ (5)、セグロセキレイ (3)、カワラバト (5) 計 33 種

あいにくの雨のため、少人数での観察となりました。雨でかすんで、遠くがよく見えませんでした。チョウゲンボウやナベヅルを見ることができました。

● ベルファーム探鳥会

2016年12月4日(日) 9:30～11:00

松阪市伊勢寺町 松阪市農業公園ベルファーム

松島 雅之 加藤 恭子 参加者 31 名 (会員 23 名)

オカヨシガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、カイツブリ、ダイサギ、コサギ、バン、オオバン、イソシギ、トビ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ヤマガラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、シメ、イカル、ホオジロ 計 34 種

天候にも恵まれたたくさんの方々に参加していただき、有意義な探鳥会になりました。普段探鳥会に参加することのない私にはよく分かりませんが、非会員の参加が少ないのではないのでしょうか？今後会のメンバー獲得のためには、非会員の参加を促す方策を考えなくてはと思っています。

● 員弁川探鳥会

2016年12月11日(日) 9:00～12:00

いなべ市員弁町 員弁川周辺

共催団体/県立いなべ総合学園高校

近藤 義孝 参加者 14 名 (会員 8 名)

マガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、ケリ、クサシギ、イソシギ、トビ、ノスリ、カワセミ、チョウゲンボウ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、ドバト 計 32 種

冬らしい寒い日でした。鳥の種類は 32 種類と多かったのですが、寒さのためか羽数は少なめでした。チョウゲンボウを、長い時間観察できて良かったです。

● 身近な冬鳥を観察しよう

2016年12月17日(土) 9:30～11:30

津市 三重県総合博物館周辺の溜池

共催/三重県総合博物館

平井 正志 参加者 14 名 (会員 5 名)

マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、カワウ、オオバン、イソシギ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ヤマガラ、ヒヨドリ、メジロ、ジョウビタキ、ハクセキレイ、ビンズイ 計 20 種

気温は低かった。博物館内でカモやカイツブリなどの剥製を見て、鳥の体のつくりを予習した。その後、博物館周辺のおおさん池、ひょうたん池などを回り、カモ類を観察した。住宅地ではあるが、一部に林もあり、それなりに多様性の保った環境といえよう。しかし、池のコンクリート護岸は野鳥にとって好ましいものではない。カモ類は一通りお出ましになったが、全部で 20 種とやや少なめであった。

博物館で参加者を公募したのだが、ベテランの参加者が多く、初心者が少なかったのは残念。

● 磯部川水系探鳥会

2016年12月18日(日) 9:30～11:30

志摩市磯部町穴川 穴川～迫間～下之郷

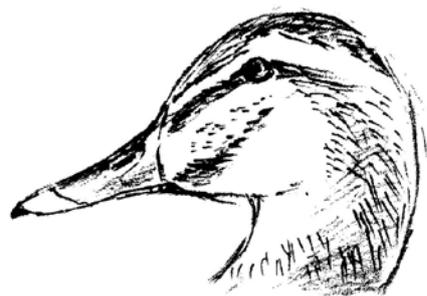
濱屋 勝則 西村 泉 参加者 15 名 (会員 11 名)

ヒドリガモ、カルガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、オオバン、イソシギ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、オオタカ、チョウゲンボウ、モズ、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、タヒバリ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、カワラバト 計 33 種

穏やかな日和に恵まれ、探鳥会を開催することが出来ました。

水鳥や陸の上の鳥たち、そして上空にはたくさんの猛禽類も観察することが出来ました。

参加された方々には大変喜ばれ楽しんでいただきました。



カルガモ

● 木曾岬干拓地探鳥会

2016年12月25日(日) 9:00~12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤 義孝 米倉 静 参加者23名(会員12名)

キジ(1)、オカヨシガモ(8)、マガモ(2)、カルガモ(12)、ハシビロガモ(6)、コガモ(60)、ホシハジロ(4)、キンクロハジロ(5)、ミコアイサ(1)、カイツブリ(13)、カンムリカイツブリ(1)、ハジロカイツブリ(1)、キジバト(2)、カワウ(4000)、アオサギ(3)、ダイサギ(2)、オオバン(30)、イソシギ(2)、ユリカモメ(1)、ウミネコ(2)、カモメ(1)、ミサゴ(4)、トビ(1)、チュウヒ(1)、ハイタカ(3)、ノスリ(4)、チョウゲンボウ(3)、モズ(2)、ハシボソガラス(200)、ハシブトガラス(200)、ヒバリ(6)、ヒヨドリ(30)、ウグイス(1)、メジロ(3)、ムクドリ(40)、シロハラ(1)、ツグミ(50)、ジョウビタキ(1)、スズメ(120)、ハクセキレイ(6)、セグロセキレイ(2)、タヒバリ(1)、カワラヒワ(4)、ホオジロ(5)、カワラバト(40) 計45種

風も弱く絶好の観察日和でした。

ノスリやチョウゲンボウ、ハイタカ、チュウヒなども観察できました。

● ミヤコドリカウント探鳥会

2017年1月7日(土) 13:00~14:00

伊勢湾西岸各地(川越町 高松海岸から伊勢市 池ノ浦まで)

今井 光昌 平井 正志 参加者17名(会員17名)

ミヤコドリ(138)、ズグロカモメ(13)、コクガン(17)

ミヤコドリは138羽を記録し、これまでの最高を更新した。コクガンも17羽と多数であった。詳細は後日報告します。

● 横山池・安濃ダム探鳥会

2017年1月8日(日) 10:00~12:00

津市芸濃町 横山池・安濃ダム

落合 修 杉村 滋弘 参加者10名(会員7名)

オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、オオバン、コゲラ、モズ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロ、ムクドリ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、カシラダカ、カワラバト 計31種

雨予報でも10名の参加者に来ていただきました。横山池では小雨の中、ミコアイサ他様々なカモ類、カシラダカの群れなどを観察できました。

安濃ダムでは雨の強く降る中、東屋の中で観察しました。

● 上野森林公園探鳥会

2017年1月15日(日) 開催予定でしたが、降雪のため中止しました。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2017年1月22日(日) 9:00~12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤 義孝 米倉 静 参加者11名(会員8名)

オカヨシガモ(2)、マガモ(3)、カルガモ(25)、ハシビロガモ(6)、コガモ(50)、ホシハジロ(17)、キンクロハジロ(5)、カイツブリ(15)、キジバト(2)、カワウ(100)、アオサギ(2)、ダイサギ(1)、オオバン(10)、タゲリ(15)、イソシギ(2)、ウミネコ(2)、カモメ(1)、ミサゴ(5)、チュウヒ(1)、ハイタカ(1)、オオタカ(3)、ノスリ(1)、カワセミ(1)、チョウゲンボウ(2)、モズ(4)、ハシボソガラス(250)、ハシブトガラス(100)、シジュウカラ(3)、ヒバリ(5)、ヒヨドリ(25)、ウグイス(1)、メジロ(3)、ムクドリ(70)、シロハラ(2)、ツグミ(50)、ジョウビタキ(3)、イソヒヨドリ(1)、スズメ(200)、ハクセキレイ(15)、セグロセキレイ(1)、タヒバリ(10)、カワラヒワ(40)、ホオジロ(5)、アオジ(5)、カワラバト(50) 計45種

先月に続き、日差しが差し込み風も弱くて絶好の探鳥会日和でした。

ハイタカ、チョウゲンボウ、オオタカなどが次々に現れてくれました。



チョウゲンボウ

● 両ヶ池探鳥会

2017年1月28日(土) 10:00～12:00

いなべ市大安町石樽東 両ヶ池公園

安藤 宣朗 参加者 11名(会員 9名)

オカヨシガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、ゴイサギ、アオサギ、オオバン、ケリ、イカルチドリ、アオアシシギ、トビ、ノスリ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、セグロセキレイ、アトリ、カワラヒワ、シメ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ 計 36種

両ヶ池の上池は、水抜きされていて約60%の水量、下池は、年末から水抜きされていたがほぼ100%の水量なるも餌が無いのか?カモたちはまばらであった。お目当てのミコアイサは健在で雄5羽雌3羽が観察され、暖かい日差しを浴びて真っ白な姿がとても印象的であった。コガモ、キンクロハジロなど8種のカモ類と可愛いホシゴイ(ゴイサギの幼鳥)に魅せられながら上池の湖畔林を散策しシメ、ツグミ、カシラダカなど小鳥を楽しみました。観察できた鳥は36種類でした。

● 大淀海岸探鳥会

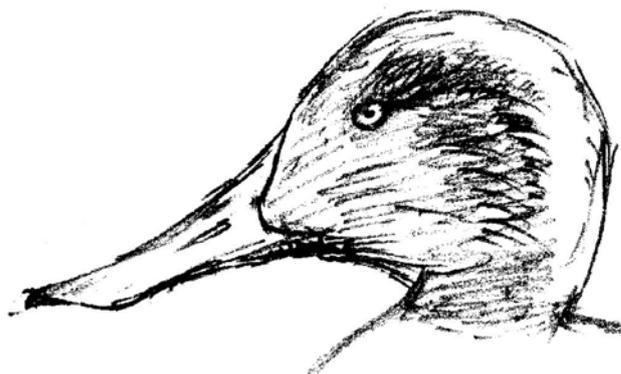
2017年1月29日(日) 9:30～11:30

多気郡明和町 大淀海岸

岡本 忠佳 中村 悦子 参加者 12名(会員 10名)

キジ、ヒドリガモ、マガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ウミアイサ、ハジロカイツブリ、キジバト、カワウ、ヒメウ、アオサギ、オオバン、ダイゼン、シロチドリ、ミユビシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、トビ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、ビンズイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ 計 34種

今回は風もなく暖かい日でしたが、好天すぎて海岸ではスズガモの群れとミユビシギ、シロチドリが数羽ほどでした。漁港内にヒメウが1羽いてカワウとの比較が近くできました。ソーラーパネルの下は雑草が生えていてビンズイ、ジョウビタキ、シロハラなどが見られました。



ハシビロガモ

編集後記

前回より新しいレイアウトソフトが導入され、私も本格的に使用して編集作業に携わっており、今回は私(笹間)がここを書いている。とは言えまだまだソフトを使いこなすというレベルには程遠く何とか使えるコマンドを駆使してデザインしている状態である。

この編集作業が終わっても次回が始まる前までには覚えることが多く、もっと使える様にならなくては皆さんへこの会報誌が届けられるのが遅れてしまうので責任重大である。毎回皆さんから寄せられる原稿はいろいろ工夫されているのでそれに応えて私も編集作業をもっと充実させていきたいと思っている。(T.S)

しろちどり 91号

2017年4月1日発行

題字：濱田 稔

表紙絵：平井正志

カット：平井正志

編集：平井正志・笹間俊秋・三曾田 明

発行所：日本野鳥の会三重

平井正志方

514-2325 津市安濃町田端上野 910-49

<http://miebird.org/>

印刷：株式会社プリントパック

617-0003 京都府向日市